２０１２年度卒業式　式辞

中京大学学長
北川　薫

中京大学で学び、本日ここに、めでたく卒業式を迎えられた学部卒業生の皆さん、ならびに大学院で修士あるいは博士の学位を取得された皆さんに対し、教職員を代表して心からお祝い申し上げます。

また、ご子弟の卒業を待ち望んでこられたご父母や保護者の皆様の喜びもいかばかりかと拝察いたします。今日までの慈(いつく)しみに対して心からの敬意とともに、大学へ賜りましたご支援に感謝を申し上げます。そして、本日ここにご列席の方々とご一緒に、卒業生諸君の希望に満ちたこの日を、晴れやかな気持ちでお祝いしたいと存じます。

さて、今日、盛んに見聞きする言葉に「グローバル」があります。グローバルとは地球規模、地球標準ということで、グローバル化されることで、ヒト、モノ、金が国境という境界線を越えて、自由に行き交うことになります。海に囲まれた日本では、なかなか実感しづらい面もありますが、国境という境は、古来、人為的に定められただけであって、永久不変のものではありません。陸続きのヨーロッパでは、近年まで国境は揺れ動き、領土と資源を巡って、戦争が繰り返されてきたことは皆さんもご存じのはずです。

そのヨーロッパで、編み出された知恵が、現在の EU です。もともとはヨーロッパ石炭鉄鋼共同体でした。基幹産業であり、武器製造の源でもある石炭と鉄鋼を、国を越えて共同管理することで、戦争という「いさかい」を未然に防ごうという考えです。やがて、こうした考えは、EEC 即ち「ヨーロッパ経済共同体」へ、そして今日の EU に発展してきました。

世界全体を見渡してみますと、これと同じような流れが動いています。まだ国境という際はあるものの、インターナショナル即ち国際化の時代へと、そして際のないグローバル即ち地球化を目指す時代へと向かっています。

しかし、際がなくなることにより、個人がストレートに世界と向き合うことになります。それまで、国に所属することで感ずることができた安心感は薄くなるでしょう。グローバルの世界で求められるのは、アイデンティティー、いわゆる個の充実に違いありません。

イギリスの セント・アンドルーズ大学名誉学長も務めたジョン・スチュアート・ミルは、十九世紀半ば、自由論という著作の中で、

『唯一の確実な永続的な改革の源泉は自由である。なぜならば自由によってこそ、およそ存在している限りの個人と同じ数の独立した改革の中心がありう

るからである
　異端の中から進歩に向かう新しい芽を育てられるかどうかが、文明の創造力を左右する決定的な要因であることは明らかだ』
　と、言っています。
　グローバルの時代では、ヒト、モノ、金が自由に地球規模で行き交います。その自由の中で、個人が互いに切磋琢磨し、自らを高めあって改革を推し進め、異端と思われるような動きの中にも進歩の芽を見出し、育てていく。それが人類の文明を推し進める力となります。百五十年前に、ミルはグローバルな時代を、そう見通していたのではないでしょうO ~
　しかし、現実には尖閣、竹島をめぐる日本、中国、韓国の緊張がありますし、また世界には民族や宗教をめぐる対立や紛争は多く、その中で日本人を含む数多くの人々が命を落としています。際（きわ）と際（きわ）のせめぎあいが悲劇を招いているのです。国の境、際（きわ）は多様性を認め合うことで、際（きわ）ではなくなります。そこでは、国に頼ったアイデンティティーは意味をなくすことになるでしょう。そのためにも、皆さん自身の個を充実していくことが、極めて重要なことになります。
　皆さんが学んだ中京大学の開学者・梅村清明は、建学の精神である「学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ」を引き、四大綱として①「ルールを守る」②「ベストを尽くす」③「チームワークをつくる」④「相手に敬意をはらう」と教えています。この四大綱の精神こそが、まさに真にグローバルな世界での生き方を指し示しているのではないでしょうか。
　皆さんは、何もグローバルスタンダードと称される標準に、惑わされることはありません。自分を磨き、どこまでも自分らしさを素直に出し、相手を尊重することで、チームワークを作っていくこと、それがグローバルの意味していることなのです。
　卒業に当たって、私が申し上げたいことは、まさにこの建学の精神にあります。「自分という存在は社会とともにあり、他者とともにある」という認識を持つことです。決して独りよがりにならないよう心がけていただきたいのです。個人が頑張ることは言うまでもなく必要ですが、集団の中にあっては他人の気持ちを察する「心」と「謙虚さ」を失わないでいただきたいのです。
　ところで、建学の精神にうたわれている「スポーツ」では、大変な事態が生じています。高校では部活での教員による暴力、競技団体では個人の尊厳をないがしろにする指導体制、がそうです。スポーツの場において、このような悲惨な事件はあってはなりません。卒業生の皆さんの中には、教員として、あるいはスポーツの指導者として、社会へ羽ばたく方々は少なくないと思います。そうした現場においては、建学の精神を思い起こし、このような悲惨な事件が

二度と起きぬよう、心してください。

　さて、中京大学は二〇一四年に創立六〇年を迎えます。卒業生は十一万人を超えました。この歴史は、卒業生が汗を流し、苦労をして築いた歴史です。皆さんの先輩は、世界と日本、あるいは地域と家庭というように多くの場で働き、歴史を作ってこられました。本日、卒業式を迎えた諸君は、自信と、伝統ある「中京スピリッツ」の誇りを持ち自信を持って、先輩に続いて新しい歴史を刻んでいってください。こうした皆さんに対して、中京大学は、卒業後も応援し、支援を続けていきます。皆さんの母校は、これからもますます発展をしていきます。

　以上、皆さんの前途に幸い多き道が開けていることを信じ、また皆さん、それぞれのこれからの健闘を祈って、私の贈る言葉といたします。

　本日はご卒業、誠におめでとうございます。